

淡な眼附をして、その日の夕方あの方を連れておたちになりました。その時あの方は矢張り行商人の扮装をなさつて、眼には二ばい涙を溜めてお出でました。

「まあ冷淡な叔父さん！」

妻は涙ぐましい様な氣持の中に、憎しみの念のもゆるのを感じました。そしてそれは、穴がち叔父さんとおつしやるあの四十男に對してばかりではありませんでした。

その後妻はしばらくはあの方のことが思ひ出されてなりませんでした。そしてその都度「救うんだ！助けてやるんだ！」とおつしやつた巡査さんの言葉に異様に反抗心を唆られるのでした。

あの方の「謎の肉體」は解けず、澄みませんでしたでしょうか。もし解けたとすればどんな風に解けたでしょうか。妻は今でもよく恚んな事を考へるのでございます。そしてすべてがあの方の杞憂であつたのならばいと思ふのでございます。

——一九・八・一〇——

地 獄 廻 り

佐々木 高 遠

彼等が立つて來たB町から數哩、海岸に沿うて走つた汽車は今田舎めいた小さな一驛に停つた。彼は急に立ち上つて手提鞆を此所の驛で打つべく頼まれた電報とを持ち乍ら、一行に世話になつた禮やら何やら述べた。プラットホームに下りた。此のK驛は田舎ながら海岸の温泉場だけに相當の客があつた。ブリツチがな

いので多くの男女が荷物片手に汽車の出るのを待つてゐた。大抵は湯治客の様だ。向ふ方には見送りに來たらしい若い女連が車中の男と盛に噪しやいでゐた。彼は二等車の前に車内の一行と向き合つて立つたが、此の頃身体のせい加妙に老人の様に濕ひのどれない涙つばい眼を氣にし乍ら頻にしばたゝいてゐた。今にもはち切れさうに丸々と肥つた、いはゆるベビートちゃんは其の雪白の肌に軽い洋服を纏うて大木をばに抱かれ乍ら恥しさうに傾げた首ををばの胸につけて彼を眺めてゐる。

「ベビイちゃん、ばあ」と、彼がお愛想すると、くりくりした眼や頬に溢れる様な微笑を浮べた。じつと嬰兒を眺めてゐるをばの顔にも覺えず微笑が反射した。隣の窓からは大木で貰つて育てゝゐる五つになる男子や平岩の九つになる健吉やが元氣に溢れた顔を出して。

「僕、ハンカチ振るよ」と車の出るのが待ち遠しさう。健吉の姉の下髪姿の芳子は其の側におどなく控へてゐた。女學校の一年生で年は未だ十三だと云ふが、母親を失つてゐるせい加、弟の世話やら躰やらなかなか姉さんぶりで、否時としてはお母さんぶりで迄發揮しさうな様子である。

「歸つたらお父さんに宜しく云つて頂戴」と彼は健吉の方を向いて言つた。健吉の父は近々彼の従姉の夫たるべき人である。

「うん、言つとくよ」と輕快に應へる健吉の側で芳子も「わゝ」と輕く會釋した。

汽車はやがて動き出した彼は「では御機嫌よう」と別れを告げる。大木の小父や小母の弟の清水兄弟など子供供の後に立ち乍ら辭儀する。健吉等は窓から顔を突き出して頻にハンカチを振る。彼も麥藁帽を高く擧げて振つた。可愛い童よ！、遠さかつて行く車窓に向白いハンカチが見える。線路が少しうねつて見えなくなつ

たので急いで後方に退いたが、ごや／＼と動き出した下車客の影で見えなかつた。やがて列車は短い眞直なトンネルに入つて通り過ぎて明るい前方に小さく現れた。

別れは淋しい。只一日の親しみだつたけれど、しみ／＼思ふ。願はくば彼等の將來に幸あれど覺えず彼は祈念した。別れの故ともなく泌み出た涙をそつと拭いてゐると、突然恐ろしい前兆に似た感じが、昨朝來暗雲に閉された彼の胸を閃き過ぎた。

彼が郷里から退屈な長い汽車の旅を續けてB町に在る叔父の家に着いたのは、一昨夜のもう宵を過ぎた頃であつた。「靖ちゃん、もう來ないのかと思つてゐたよ」と彼の従姉があたふた出迎へてくれた。彼女が前日郷里に墓參の砌彼の家に寄つた時後から行くやうに約束してゐたのだ。大木の媒介で平岩に嫁するやうになつてゐるのは彼女である。彼はB温泉場方面にも行くつもりで未だ行つたものない叔父の家にも行つてみたかつたし、彼女ともゆつくり話しかつたのだ。彼は其の夜晩く迄叔父や彼女と語つた。彼は四五日位居るつもりだつた。B町にも行きたい、其の日彼女が清水兄弟や平岩の子等と見物して廻つたと云ふ地獄廻りもしたいと思つて、其の夜の眠りに入つたのであつた。彼には義兄に當る彼女の兄から思ひがけない飛電に驚かされたのは其の眞夜中であつた。「トシセツピョーキケンタレカキテ」讀み上げる叔母の聲は噎れてゐた。トシは彼の姉だ、トシ死すと聞き違へた彼は泣き出しさうな氣分と自暴とがこみ上げて來た。幸に姉と四つになる子の節子が……と知つてはつとしたが、昨秋の大病以來充分回復してゐない姉の生命は心配に堪へなかつた。何病だらう、チブスカしら、まさかコレラぢやあるまい。朝一番の汽車で取り敢へず如才のない従

姉が行くことになつたので彼は安堵した。近々式を擧げる大事な身だが外に人が無かつたし世話などにかけては最適者だつたのだ。彼の母にも叔父から電報が打たれた。彼も其の朝即ち昨朝母と妹に介抱に行つて貰ふ事や自分は急に歸るべきかと云ふ事など相談の爲B町迄電話かけに行つたが郷里迄は通せず「アスカヘル云々」の電報を打つて、丁度避暑に來てゐた大木の宿に厄介になつたのであつた。宿では元氣な子等が室中を跳ね廻つてゐた。西瓜割る折や菓子分配の時など子等をおとなしく待たするのは容易でなかつた。諧謔家の健吉は中にもよくおどけてゐた。「ぢやんけんげんこつ、あいこであいたゝ」など可笑な身振りをして皆を笑はせたりした。すると五つのが直ぐ又眞似して二人でころげ廻るのである。其の中で芳子は監督者の位地に立つて羨したり叱つたりお伽本を讀んで聞かせたりしてゐた。

大木の小父は用があるので上の子等三人を連れて昨夜船でK市に歸る筈だつたのだが、商船會社の事務所で手違ひが出來たので、急に翌朝汽車で皆一緒に引上げることにしたのであつた。

彼は慌しい此の二三日の事を思ふともなく思ひ浮べ乍らK驛を出た。八月下旬の大空は氣持好いまで晴れ上つて眞青の空に手を差し伸べたポプラの枝に風が微に搖いでゐた。驛前の廣場を出ると、乗合馬車が一臺客を待つてゐた。若い女の後姿が瞬時空想的な青春期の氣紛れ心を唆かせた。見ず知らずの女と戀人の様に親しみ語り合ひ乍ら白雲の湧く山々の奇勝を探り廻つて終には互に何處の誰とも明かさないうでばつと別れてしまふ……など思つてみる。後になつて互に戀を自覺して消すに消されぬ思ひに心も空になつて慕ひ合ふが尋ねる術は知らず、二人共たゞぼんやり夢のやうな烟のやうな山の旅を懐しんでゐる……としたら一層ロマ

ンチツクだ。だが、突然窓から現れた平凡な女の横顔が無残にも空想を破壊してしまふ。一筋道の兩側に家が立ち並んだ細長いK町を一町許り過ぎると、左手に穏かな海が現れ右手には野や青い山丘の彼方××嶽等の群山が高く雲に連つて見えた。道標のまに／＼道を右に折れて線路を越えた。先刻の馬車は何處に行くのか真直に走り過ぎた。あれに乗ら込んでゐたら……と其の折の狼狽が滑稽に想像される、やがて田畑を貫く郡道を歩んでゐると幾程もないのにもうそろ／＼春の汗が滲み出るのを覺えた。商人らしい男が肌衣一枚の肌脱ぎ姿で遠く前方を行くのが白く光つて見えた。青やかな快い風が折々流れ過ぎた。

照りつける陽光の暑さと明るさで彼の頭は醗酵したかのやうに微睡に似た安易な氣分が靜に漲り渡つてゐた。遠く一列の車臺と共に消へ去つた大木夫婦や清水兄弟や無邪氣な童等など一團の姿が、微妙な運命の交錯のやうにぼんやりと現れた。過去の夢未來の幻影など青春の渦巻を中心として艶麗な花園の様に展開されて行つた。或はその花園を通り過ぎ或は通りかゝり或は未だ其の存在をも覺らない人々。そして總ては同じやうな轉變を繰返すのだ。今や盛装した例の従姉がやがて花のあはひに現れた。義兄夫婦の影も彩られた。彼等夫婦はよく知り合つた従兄妹同志で數年前華かな夢と憧れを抱いて結婚生活の道程に上つたのであつた。夫れが兎に角今迄無事に、殆ど年兒だからでもあるがもう四人の子等の父となり母となつて暮して來たのに突如として妖星の呪の一瞥が襲つて來たのだ。やがて優しい姉の顔容が青い花と共に淵み去つてしまふかも知れない。昨日の夢今日の夢明日の夢と人が何氣なく夢み微睡んでゐる間に黒い運命の手は霹靂のやうに閃き下るのだ。然し小さい人間の力は夫れを如何ともする事が出來ない。此の世に生れて誰でもが戀をして誰でもが家庭を造つてやがて誰でもが死んで行く。夫れは唯當然な極平凡な推移のやうで、又よく考へてみる

ぞ不可思議極る事であつた。

小川に沿うた白い一筋道の片側には茅や雜草が生ひ茂つてゐた。彼方から來た一頭の馬が其の草を食まうとして百姓男に逐ひ立てられてやがて行き過ぎた。百姓が、父祖代々やつて來た通り一生同じ仕事をして同じ暗い家に生れてやがて死ぬのも、馬の短い何でもない一生でさへも、思つてみれば一種の驚異である。あゝ生の驚異！、生の不可思議！、彼は突然盲目の眼が明いたやうな此の新しい心持を久しぶり味つて珍らしい獲物でも得たやうな感じがした。だが世間離れした禪僧のやうに遙に人生を展望してゐた彼の心にも、一方目前の姉の病は凄い妖火となつてちろ／＼と燃え上つては又細り薄れた。「然し」と彼は考へた、「自分が今時を惜んで急遽歸郷したとて何であらう。母と上の妹は最早姉の介抱の爲出立して、後は伯母と下の妹などが頼りながつてゐるかも知れぬが(彼の父はもうゐないのだ)折角一日が、りで遙々來たのに何一つ見物しないで歸るのも惜しい。家事は一日二日位延す事が出来る。義兄からの便りを一緒に待ち乍ら案じたつて下らない。姉の大病を前にして見物も似合はしからぬが危険と云ふ位で今急にどうと云ふのではない……一二時間の道草は……決して咎むるに當らない」彼は頸にかけた手拭ひで額の汗を拭ひ乍らしきりに扇子でふところ風を入れた。右手に近く學校か役場だと思つてゐた廣い一構の門前に來ると「長生閣」と云ふ温泉宿だつた。

道に沿うた小川は或は道の下方にせゝらぎの音を響かせ或は道と肩を並べて、恰も蜿蜒として赤い大蛇が丘を遡つてゐるやうである。鑛泉の爲川底も岸の岩石も赤く染つてゐる。手をつけてみると温いより寧ろ熱

い位だつた。道は段々と坂になる。石ころは多くなる。彼は足を踏みしめ、登り出した。麥畑があつた、黍の穂が見えた。雜木も立つてゐた。尙進んで少し道が曲ると突然前方に濛々たる白煙が、雜木山を背景に現れた。覺悟すはつと思ふ。建てかけの煉瓦家やその向ふの建築の材木の骨組などが今焼け落ちて燻つてゐるのかと疑はれる。足を早めてだら／＼坂を登ると、血の池焼など云ふ焼物を並べてゐる小店に相對して浴場新設中だつた。血の池絞りなど云ふ褐色の染手拭が干し列べられてゐる所もあつた。血の池地獄の柵内に入ると茶屋で手拭繪葉書など賣つてゐた。此の邊の地獄は何處でも見物料として大枚五錢也を出さねばならぬ遊覽者が七八人休憩してゐた。池の底に淀んだのを探つてゐる赤土で手巾などに繪を描いてゐる人もあつた。此處は名の示す通り眞赤な池だ。直徑何間だか知らぬが其の手もつけられない熱湯の池から煙がむく／＼と湧き上つて居る。附近の草木が弱つて居ないので見ると硫黄氣はないらしい。金棒持つた鬼が亡者共を熱湯に投げ入れて責め苛むと云ふ幼時に聞かされた記憶がゆくりなく胸によみがへつて來たが、物凄いな地鳴りなど無いので是は割に穩かな感じである。

暫く休んでゐると十二時になつた。K驛で下車したのが午前十時、一二時間もあれば一廻り出来るやうな話だつたが此の分では十二時の汽車には間に合はぬかも知れぬ。遅れては大變だ。彼は急いで此處を出て柵の右手の山路へかゝつた。數町ありなしで竈戸地獄に出た。是は前のと反對に眞青な透明な熱湯の池。汲み出してゐる湯を呑むと口を絞る位だが快い酸さである。池の縁の巖の背後に藁など燻してゐる。此の煙が混すると蒸氣が一層白くなるのだと茶屋の爺さんが説明してくれる。二百八十度位の熱湯で、卵など浸けると一二分で煮ゆるし、其の蒸氣で焚くと飯も二三分ではつこり煮ゆると云ふ。池の向ふに地から蒸氣を通じ

た竈が備である。其の上手に行きと、幾千尋の底に嘯くかと思はれるやうに、地の底から蒸氣機關の響に似たぼろりと云ふ重い太い低音が響いて来る。其の穴の所にも釜を据ゑる用意が出来てる。竈戸天神に供へる飯は何時にも此處を焚くとかの此の邊のいちび(麻糸類)は此で蒸すから強いなど語つて聞かせる。彼は時計を眺め乍ら時々の刻々に移るのが氣懸りでならず、又匆々段々畑の間の新道を辿つて行つた。今から引返したとて先に行つたともうどうせ次の一時の汽車に延さねばならなくなつた。豫定より一時間も遅れると云ふとは一寸何でもない事の様だが今の身にあつては一大事件に相違なかつた。

畑の側の小溝に湯が流れてゐる。血の池邊のやうな赤味に一層黒味の混じた沈澱物が毒々しい許り流んでゐた。あゝ其の色、何と云ふ凄さだ。夫れは最早單なる色ではない。人間の血だ、胸から迸り出た致命的血流だ、肺炎で亡くなつた父が吐いたと云ふ金盞に溢れた血液だ。彼は思はず歎息した。あゝ悲しき亡父よ、彼は實に唯三時間の時に隔てられて永劫其の現身に逢へない悲痛を味つたのだ。あゝかの淋しき臨終と總てを抛出した古武士のやうな平和と莊嚴とが一層人を歎かしめる。怪しき時の戯れ、運命の仕業よ!!……………義兄からの電報がまた來てはゐまいかと云ふと思ふ。「トシキトクスグゴイ」彼は覺えず愕然として眼を見張り戦つたやうに唇を慄はせた。彼の吐く息が大きく波打ち乍ら静寂な山の空氣を動搖させた。彼の神經質な顔は又急に俯垂れた。姉は昨秋父と共に肺炎で死ぬ所だつたのが奇蹟のやうに助かつたのだ。今度は或はその再發かも知れぬ。あゝさうだとすると……誰がその生命を保証し得ようぞ。彼は走り出さん許に急いだ。瀟洒たる山間の勝地芝石温泉場の清流も彼の心を鎮めるに足らなかつた。路は急坂を攀ぢ雜木山を過ぎり麥畑茅畑を貫いてゐる。彼は慄ゆる心を抑へつゝひたすら祈念して小走りに辿り進んだ。思附の名をつけた極樂

園にも憩ふ餘裕はなかつた。大分行きと道の側に乳色の綺麗な流があつた。之も湯かと手を浸けると意外にも生温い水だつた。道はやがて爪先上りの大道に合する。道の處々に白烟が見ゆる。憂に沈む彼の心も烟と共に消え入らむばかりである。あるか無きかに見わた始の微かな不安はやがて恐怖と變じ、更に一轉して緊張し切つた神經は第六官の目覺を傳へたかのやうであつた。今は姉の病床に惱める姿があり／＼と眼前に現れた。眞蒼になつて慄ゆる六つになる上の娘、泣き叫ぶ下の子等、血走つた義兄の腫、更に従姉や母妹等の悲苦を包んだ姿。陰暗の氣の漲る部屋に藥瓶を枕頭にして姉は大きく喘いでゐる。唇の邊が折々痙攣する。眼が半分開きかゝつて又靜に閉ぢてしまふ。手が怪しげに動いてやつと子を抱くやうな手附をした。下の子を抱かせてくれと云ふのかと、じつと側に子を寄せる。子は泣き出しも得ないで母親の紅潮した顔を不安さうに覗く。白服の醫者が現れる。緣先で宿なし猫が「ニール」と氣味悪い啼聲を立てる……

「姉さん!!」彼は覺わす聲を舉げて愕然として現實に歸つた。此處は海地獄の苑内である。先刻見たやうな乳色の水が海かと疑はれるまで紺青を帯びてなみ／＼と湛へてゐる大池に池畔の松杉や背後の緑の山容が心行くまで澄み切つた影を映じてゐる。深からぬ池底には朽ちた落葉が淀んでゐる。天地寂として一鳥の聲だにない。遙に池の彼方地獄の一團の白烟は死のやうに黙して只上へ／＼と昇つてゐる。

「姉さん許して頂戴、決して貴方のを忘れてはゐません」彼は獨り呟いて祈念の頭を垂れた。彼の耳には姉の優しい聲がはつきり響いてゐた。

「靖ちゃん……さよなら……」

「いや未だ死んではなりません。後のをどうします」

「……………」
姉の肉附のいゝ頬は病中でも美しく匂うてゐた。眼も唇も右のやうに閉ぢられたまゝ。彼は魔物を拂ひ落すかのやうに頭を振つた。

「お、神よ、暫しなりとも姉の生命を留めさせ給へ」

芝生の小丘や青み切つた池、阿亭林泉の布置など平和な海地獄は美しい夢の國をいやが上に世間離れさせる爲かのやうに雲烟白く霧らひ流れて四邊を罩めてゐる。靄のやうな烟を隔て、見ゆる丘上の新築家が前栽の樹石と共に雅致ある風情を形造つてゐる。茶屋では辨當を食べてゐる客がある。もう正午である。茶屋を受け持つてる、男のやうな物言ひをする娘が「此處は入場料を取る所とは別の家でやつてるのだからね、茶代は置いて行つて貰はないと私が後で叱られますのさ」と突慳貪に田舎者らしい女連にあてつけてゐる。やはり此處もせち辛い人間の世である。彼は苛立つ胸の中で時間を計り乍ら道を下りかゝる。鐵輪温泉には大分宿屋が立ち並んでゐた。B町から來たらしい自働車も一臺あつた。彼は坦々たる大道をひた向きに急いだ千二百年前とか景行天皇が亡されたと傳ふる土蜘蛛の巢窟鬼の石窟にも一寸立ち寄つてK温泉場を過ぎつた一時の汽車にはもう間もない。湯に入りたいがそんなことはならぬ。黙つて道を辿り行く彼の心は石窟の中にでも入つたやうに只暗く温つてゐた。今度の汽車に遅れたら夫れこそ大變だと思ふ。然しよしや遅れずとも危篤の報が既に／＼届いてゐるのではあるまいか。父の臨終に遅れた彼は、今度もまた地獄廻りの遊覽に――繪葉書の記念スタンプの遊覽の文字を見た時彼が如何に苦痛を感じたかを解する者は少からう――三時間を費して自ら態々悔を求めたのではないたらうか。「あゝ、呪はれたるかな我々」彼の憂悶は募つて終には

狂燥な自暴となつた。「死ね〜。みんな死んでしまへ。」彼の頭は心配と炎暑で昏倒せん許りに疲勞困憊してゐた。

K驛から程ないH驛に下りて親族の家に急いだ間の彼の心は、窶かなる覺悟と破るゝ許りの懊惱と後悔とを以て一方には「只今度丈は無事なれ。再びと願はず、只今日丈は安堵せしめ給へ」と念じ祈つた。家に近づくに従て彼の胸は怒濤のやうに亂れ騒いだ。暫時でも此の苦しさ恐ろしさから逃れたくなつて、歸ることを躊躇はうとさへした。然し門を入ると、家はいつものやうに静かだつた。

「只今」と玄關で呼ぶと、子等が「靖雄さんが歸んなさつた」と躍り勇んで走り出て來た。「お母さんは」と問ふと「他所に行かれた」との返事。彼は大したとはなかつたのだと思つて始めてほつとした。尙尋ねると、家の人が電報を持つて來た。夫れにはまゝ何と云ふ嬉しい事か「オイデミアワセ」と云ふ七字、間接乍ら其の病氣の重くないことを語つてゐるのだ。あゝ總ては杞憂で濟んだのか!!!、彼の胸には新に油然として感謝の念が溢れ出るのを覺へた。彼の眼の濕ひも急に喜びで輝いて見えた。眞に地獄を出て極樂に移つた人の様に彼の心は輕快に躍つた。だが一体姉達の病氣は何だらう?、兎に角大木へも早速電報を打たねばならぬ。從姉の婚儀も此の分では滞りなく行へるに違ない。

緣先に立つて青空を仰いでゐると、明るい陽光が無數の玉となつて輝くやうに見えた。憂ひつゝ先刻辿り廻つた彼方の山並の上方には白い斷れ雲が一片ふわりと懸つてゐた。